

5-5

主題	おむつアンダー30%を目指して
----	-----------------

ケアの質の向上

おむつアンダー30%

研究期間	18ヶ月
------	------

副題	和田堀ホームにおける排泄ケアの取り組み ～なぜ「おむつ」なのか？～
----	--------------------------------------

事業所	特別養護老人ホーム 和田堀ホーム
-----	------------------

発表者：介護職員 野本義和	アドバイザー：
---------------	---------

共同研究者：河野訓子、君塚浩美、佐々木育子、佐藤純也、山田大吾、利田美子、大塚克久

電 話	03-3316-2943	メール	soudan@island.dti.ne.jp
-----	--------------	-----	-------------------------

FAX	03-3316-2973	URL	http://www.shinsyounokai.or.jp/
-----	--------------	-----	---------------------------------

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	一度しかない人生を楽しみつつ安らいで過ごせる施設を目指し、個別のケースカンファレンスを充実させ、サービスの第三者評価を導入し、福祉QCにて活性化を図りながら介護力の向上、職員の資質の向上、個別ケアの充実に取り組んでいます。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》

これまで施設として、おむつアンダー30%に取り組んできたが、なかなか目標達成に至らず、そのため取り組み直すこととした。

《研究の目標と期待する成果》

日々の排泄介助、委員会等の活動を通じて

- ・利用者の機能維持・向上
- ・職員の意識向上（おむつに頼らない介護）
- ・利用者の理解を深めること

を期待し、おむつアンダー30%を目標に取り組んだ。そして、今もなお取り組んでいる。

《具体的な取り組みの内容》

- 利用者の個別排泄状況の把握（時間、量）
- 身体的な評価の見直し（残存機能評価）
ポータブルトイレの使用
トイレ誘導への試行
ベッド上での動作など
- 精神的な状況の把握と見直し
認知力、理解力、行動観察、感情表現などによる心情把握
- 生活リハビリの考え方強化
- パンツの種類、形態を検討・試行

《取り組みの結果と評価》

以前は半数以上の利用者がおむつであったが、昨年度平均では42%にまでに減少してきた。

利用者の高齢化と介護の重度化のために、30%以下という目標は困難を窮めているが、職員の「おむつに頼らない」という意識は広がりつつ、高まりをみせている。月別では30%を下る月も見られるようになり、着実に効果が上がってきたと評価している。

《まとめ》

リハビリパンツもオムツと考えるならば、もっと積極的な取り組みが必要であると考え。おむつアンダー30%という目標を達成させるべく、QCサークルを発足する予定である。

《参考文献》

「仕事としての老人ケアの気合」高口光子著

《提案と発信》

「排泄」とは最も人間的な、その人の尊厳やプライバシーに深く根ざした基本的な生活行為であり、そのケアにはそれにふさわしい配慮が求められる。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。